

希望 21

ありふれたことだけど
かけがえのない
希望がここにある

People's Hope for 21 century

平和・自治・共生

No.31

1部 200円 年間購読 3000円

神奈川県相模原市上鶴間2973-3-110

TEL & FAX 0427-40-4794

NIFTYserve ID: JAH03412

郵便振替: 00100-1-97125 希望 21



グローバル経済から人々を 生かす経済へ

石田伸子 (希望 21 全国委員)

●グローバリゼーション神話の崩壊

「アジア経済危機」はタイ、インドネシア、マレーシア、韓国を駆けめぐり、「成長のアジア神話」のペールをひきはがした。大量の外資が、「生産」にかかわらない、不動産や株式など非生産的、投機的な部門に投じることで押し上げられた「経済成長」が「アジアの奇跡」だったことがあきらかになっている。元気そうにみえた体に実は深く病が進行していて、気がついたら危険な状態におちいつてしまった病人に、世界の名医IMFは、どんな病にもきく「万能薬」、外国製品の輸入に関わる規制の撤廃、消費税の増税、食料品の専売廃止や補助金のカットなどの調合薬を示すばかりだ。国家に投じられる薬の副作用は、人々の生活を直撃する。市場を開放し、外国製品や外資を自由に出入りできるようにしたら「成長」できるという「神話」は、世界を資本が自由に歩けるようにするという、グローバリゼーションの神話ともいえる。入る自由は出る自由も保証する。出入り自由の資本にとっての素敵な世界の実現のためのツケが、人々にまわされている。

●米国にビビリ続ける日本

IMFの処方箋、そして多国籍企業の利益において、圧倒的なイニシアティブを握っているのは米国だ。毒をもった人がくれる薬を飲む、という尋常でないことがおこりうるのは、国際政治における力の偏りを前提にして可能になる。だから「アジアを治す薬はアジアで処方する」というまっとうな意見が「アジア通貨基金」の支持の根拠となりうる。これに米国は「何をいうか、腐敗や汚職にまみれた汚い手で薬を飲むから病気になるんだ。まずは手を洗え」と「透明性」「欧米的民主主義」をふりかざせば、マレーシアのような政府はこれに「アジアにはアジアの論理がある」とナショナリズムをもって切り返そうとするが、加勢を期待される「アジアの日本」は米国の顔色にビビルばかりで、「人民元は切り下げない」と声を大にして言うことでアジアでのイニシアティブを獲得しようとする中国に比して、没主体性をあらわにした。

●共生のアジアをどう構想するか？

時代は「神話」の空洞を、「人々が人間らしくいき

られる」ための豊かさの基準によって埋めていく時代だ。だから「薬はアジアで、私たち自身が処方する」と同時に、国民経済を食い物にするインドネシアのファミリービジネスや、日本の官僚と銀行の癒着などという汚職と腐敗は許さない。そして、グローバルイズムにナショナリズムを対置するのではなく、人々が、政府と政治を規定していく民主主義と自己決定にてらして、人々が共に生きられるアジアを構想する。

この「アジア経済危機」のなかにも、キーワードが探せるだろう。「経済危機」は、アジアでも、中国、台湾への影響は軽かった。中国は、自由市場経済を進行させているとはいえ、多くの進出企業を泣かせ、怒らせる「規制」がいまだ大いに幅をきかせていたためだという。資金調達には国家の縛りを受けており、政府は投機行為を規制している。だからグローバルな資本のターゲットになりえず、その結果、ばくち経済の度合いが小さくてすんだ。

一方、台湾は、中小企業が経済の主体だから、だというのだ（台湾のジャーナリスト徐氏のコラム「台湾が経済危機に強い理由」三月十八日毎日新聞）。中小企業だから銀行融資規模が限られた、国民党政府は中国革命の教訓から富の分配の均質化のために財閥を押さえ中小企業を優遇した、中国人気質として皆が使われるより社長になりたがった、資金の調達の多くが銀行ではなく地縁血縁や頼母子講によって行われていた、というのが大きな特徴な

のだと言う。つまり、「グローバル」な「成長モデル」からは大いに「遅れ」た部分を温存していたからだというのだ。

企業倒産、失業、生活物資の高騰にあえぐほかのアジアの国々の状況からすれば、必ずしも意図はそうでなかったとしても、結果として、人々はそれらの要因により守られたのである。

●果たすべき国家の役割

まず、国家の役割としては、外資がほしいままに動くことを手伝うのではなく、利益のみを追って動く資本に縛りをかけることで人々を守らねばならない。安い労働力と市場を求めてやってくる出入り自由の勝手気ままな外国企業を呼び込むことでグローバル経済に身を投げ出す政策ではなく、人々が働き食っていけるスケールの自立した中小零細の企業を、人間らしい規模の経済基盤として大事に考えることだ。そして、経済活動が、おカネを商品としたバクチによって動くのではなく、生産と連動して人間と労働と暮らしをつなぐ循環として動くことが、人々の暮らしを守る経済だということができるだろう。

グローバル経済に対置して、「人間を大事にする経済」という原則で、仕組みを考え、守り、創造し、実践していくことが、バブルの脆弱さに対する人々の強さ、だ。

いま、都立学校で進んでいる管理強化

学校を地域に開く地域教育協議会づくりに着手しよう！

希望 21 三多摩 金子光史

1. 所沢高校の生徒たちに学ぶもの

今春の日の丸・君が代を巡る所沢高校の生徒会VS校長の闘いは、様々な処分を引き受けながら進めてきた従来の教育労働者の反対闘争の地平を飛躍的に拡大するものだった。硬直化した文部行政は依然として日の丸・君が代に象徴する国家主義教育を教員、児童生徒に強制し、それに抗議した教員に容赦のない処分を乱発している。処分を受けた教員たちは、全国ネットワークを作り、人事委員会への提訴や裁判というかたちで闘いを続け、PTAや地域の人々を巻き込む闘いにも取り組んでいるが、その広がりや学校の閉鎖性や文部省に直結する教育行政の硬直性などに阻まれて、大きな壁に直面している。一部の少数組合をのぞき、組合としての反対行動を放棄、あるいは押さえ込むことで、

この問題を後退化させようとする流れの中で、教員の反対行動はいきおい、少数あるいは単独の決起という形に追い込まれ、支援も含め苦しい闘いを強いられてきた。

しかし、今回の所沢高校の闘いはそうした悲壮感というものからほど遠い、さわやかな闘いを作り上げることに成功した。日の丸・君が代を文部省の請負で権力的に進めようとする校長と自主・自立の立場から生徒会として強制に反対するという構図は、それを面白おかしくドラマ化して取り上げようとするマスコミの意図ともマッチして学校教育の硬直性を大きくクローズアップした。学校権力に屈しない生徒たちの明るい闘いは、この問題が単にイデオロギーの問題なのではなく、教育を受ける生徒自身の権利の問題、学校とい

う地域の公的財産の運営をどうみんなて決定していくのかという地域社会の問題であることをより鮮明にした。

就学時検診問題や「障害」児者の地域の普通校への入学から日の丸・君が代強制、不登校、いじめ問題にまで至る様々な教育課題をこれまで

のように課題別の取り組みに分散するのではなく、教育委員会に対し、学校教育を地域に開き、教育内容、学校運営にまで生徒参加・住民参加を可能にする地域教育協議会つくるように申し入れていく、そのような時期に来ているのではないだろうか。（まずは、その第一段階として、自主的な地域教育協議会づくりの呼びかけから始めるべきだろう）

2. 時代感覚に逆行する都教委の「あり方横報告」

こうした学校教育の閉鎖性・硬直性が問われる時代に、都教委は3月、「校長のリーダーシップの確立に向けて」という副題をつけた「都立学校等あり方検討委員会報告書」なるしるものを発表した。読売新聞がスクープして2月28日の朝刊一面で大々的に報道していたので、ご記憶の読者もおられるかもしれないが、主な内容は、これまで職場の教職員が教育内容等について論議・決定していたあり方を校長に移し、学校運営のすべての面で校長・教頭がリーダーシップをとれるように規定をつくらうというもの。日の丸・君が代強制の例を取るまでもなく、いまの教育現場では校長という代物は、児童生徒や教員の方に向いているのではなく、文部省・教育委員会の方に向いているのは周知の事実。所沢高校の権力面した校長が特殊なわけではない。都教委は、こうした校長の権力を都立学校管理規定に明記して強行しようとしている。そこで生まれてくる教育は今よりも更に文部省・教育委員会に従属した硬直したものでしかないのは火を見るよりも明らかだろう。

で、組合はどうかというと、「学校管理規定は交渉事項ではない！」と交渉自体をつっぱねる都教委の頑なな姿勢に今のところ、抗議文を突きつけるのが精いっぱいというところ。この都立学校管理規定なるしるもの、組合が交渉事項に持ち込めない領域のため都民にとっても不利益を被るいろんな問題を抱えている。例えば、東京都の場



合、卒業証書の生年月日を西暦にしようとしても、在日外国人以外は認められない規定が盛り込まれていたりする。こんな時代遅れの規定の一つも組合を通してはなかなか解決ができないのが現状なのだ。

3. 住民の声で教育を変える

問題は、何がこうした現状を解決するキーになるかである。住民の税金で成り立っている教育委員会に対して「あんたたち、まちがってるよ。私らそんな教育、望んでないよ」と言い切れる住民の組織化された力が必要なのだ。多くの教育情報を閉鎖し、その是非を都民に問うことなく、教育庁内部の締め付けで乗り切ろうとする教育行政に対し、その問題性を明らかにし、何を自分たちは望んでいるかを討議し、外部からその変更を求めていく力こそが、学校を地域に取り戻していく力なのだ。地域教育協議会構想は、その組織化された形である。

今回、都教委が明らかにした「都立学校あり方検討委報告」は、これまでの学校の教員の自発性とか民主的運営という評価すべきあり方を否定し、上意下達のみつまらない学校に変えてしまう問題を抱えている。事実、この検討委員構成というのが、委員長に教育庁次長、副委員長に総務部長、教育庁の部課長クラスだけ。つまり、人間を育てるといふ教育とは別種の行政畑のお役人が作ったしるものなのだ。そのきっかけは昨年、マスコミにスクープされた都立新宿高校の習熟度別授業に配置された教員の水増し問題である。都教委はこうした学校の虚偽報告・学校の閉鎖性は住民の監査請求に耐えられないと規則通りの教員配置による学校づくりを要求。虚偽報告は職員会議が決定したもので、それを改めるには校長の権限強化が必須と居直っている。

「しかし、そうなのだろうか。ちょっと待ってよ」と、教育委員会の独走する判断にストップをかけるのは都民であり生徒の当然の権利である。しかし、残念ながら我々は未だこれに否！の声をあげる組織化された力を持っていない。また我々は都議会でこれを取り上げることのできる議員を持っているかということ、これも残念ながら疑問である。つまりはこれからの取り組みこそが我々の課題であり、チャレンジを開始するときなのである。

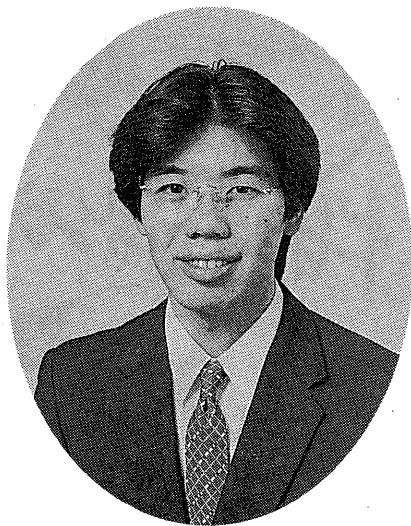
■学校を開き、教育の諸課題をオープンに討議する流れを作ろう！
■地域教育協議会づくりを開始しよう！

今村るかさん

(町田市議)

4年前、全国最年少議員(25才)として、プービー当選したるかさん。

お父さんの直さんも元市議で、在日政治犯の救援運動ではずいぶんお世話になったりもした。お父さんとは、また違った観点で政治や時代を語るるかさんに二世議員の甘さやおごりはない。今回の選挙では保坂展人氏や我らの仲間のニョキ君と宣伝カーの上に立って「希望のテーマソング」なども一緒に歌ったりしたが、それがさわやかで格好よかった。三人とも、スマート過ぎるという声も一部にあるが、これからの政治を作っていく若きホープとして期待大。29才、独身。



といわれている共産党が町田で見ると、96年が頭打ちで、ずっと下降局面に入っていると考えられます。今回もその流れを逆転することは出来なかったわけです。また、それと平行して社民党もずっと票を落とし続けているんですが、その不満票を共産党や市民派は集めてきた。それが下降局面

に入ったまま票として出てこない。ある意味ではそういった浮動票が棄権に回っている。最低の投票率にそれが表れている。大きく見ると、こうした深刻な政治離れ、政治不信をどう転換していくのかということが私たちの重大な課題だということが言えると思います。

もう一つ特徴的なのは、今回は保守系党籍の公認候補は11人中の5人だったのが、今回は12人中10人が公認候補で出ています。選挙制度の関係と言えるかとも思いますが、はっきりと保守的立場を町田市で打ち出してもマイナスにならない状況になってきたということだと思います。これまでのように、既成政党批判、無所属だからと浮動票を集めることができるということではなくなっているのではないのでしょうか。

市議選を振り返って

私自身は二回目の選挙で、今回は、一カ月前に急に出ることになり、ぎりぎりでもうにか当選できました。今回は二期目で、この4年間で作ってきた人間関係を中心に、とにかくやれることだけはやろうと取り組みました。出来たばかりの市民の絆・東京からも応援に来ていただき、全体としては7%投票率が下がった中で、662票前回よりも票を伸ばすことが出来ました。そういう意味ではよかった選挙だったんだろうと思います。しかし、若さで売って、名前を売り込んでいったという印象で、自分が何をやってきたのかという評価をどこまでしてもらえたのかという点や数の読める組織選挙ができたのかという点では全く不十分。これからの自分の課題だと思っています。

深刻な政治離れ

町田における今回の市議選を分析しますと、議席的に増えているのは自民党、公明、共産党がそれぞれ一議席、民主党が二議席です。無所属の議員が集まって作っていた会派が数を減らしています。社民党も一議席、数を減らしました。これまでの既成政党批判というか、地域密着型の市民派が票を減らし、議席を失っています。また共産党が6人候補を立てて、1人現職を落としました。共産党は今回、同時に行われた市長選とセットにして、激烈にオール与党批判を全面に出し、今の現職市政、政党の不満票を集めようとしたわけですが、現実にはピークであった96年の衆議院選時にくらべ一萬票も落としました。昨年の都議選にくらべても6千票落としています。いま一番元気である

どんな政治が求められているのか

これが分かっていたら、これだけひどい政治離れが進むこともなかったらと思います。一つは、経済の成長が頭打ちになり、未曾有の高齢化社会が到来する時代を迎え、これからはどれだけ安心して暮らせる社会を作ることが出来るのかということが問われているのではないのでしょうか。今の日本は、電気製品や車なんかだけが安くて、衣料品や食料品、教育、住宅事情など世界的に見てもべらぼうに高くなっている。こんな生活が本当に幸せなのか疑問です。今まではぜいたく品だと思っていたものが安く買えるようになったことで満たされるはずの幸せが、こんなはずじゃなかったと何となく気づき始めているのではないかと思います。今の時代を生きる人々の幸せが、なんなのか、それを政治的に表現していく。けっして不満票や批判票を受け止めていく政治でなく、もっと希望のもてる政治が求められているのだと思います。

かって、私が所属している社会党も、今よりももっと多くの人々の支持は受けていたけれども、決

して25%の支持を超えることはありませんでした。これからは反対派としてではなく、それを超えるような政治を作り出していく事が大切だと思います。それは政策的に保守政治に迎合するのではなく、社会主義とはいわなくても、より平等に安心して暮らしていくことが出来る豊かさを社会的に保障していく社会を打ち出していくことだと思います。収入は上がらなくてもある程度安心して暮らしていける、そんな社会です。しかし、理想はそうであっても社会保障制度の作り方というのは本当に難しいんだろうなと思います。

規制緩和に関しても、競争一辺倒というあり方ではなく、そこで集めた富をどう公平に分配するかが重要なんだろうと思っています。アメリカンドリームのような自由競争主義のもとでは貧富の格差がものすごく広がっていく。そうではなくて、制度の中で公平に分配するという原則にしたあり方が必要なんだろうと思います。日本の国民性に、こうした貧富の格差、競争主義が本当に合うのか、どうかということもあります。このままいけば、昔からあった醤油を借りあうような人情や助け合いの社会というのは、なくなってしまうかも知れません。集めた富はみんなで享受していくことが当たり前の社会。そんな分配の原則があれば規制緩和のイメージも変わるかも知れません。

こうした考えは、今の政治状況のもとでは人々に分かり辛いんだろうと思いますが、基本スタンスを明確にして、大胆に訴えていけばいいんじゃないでしょうか。それをどれだけ上手に人々に訴えていけるかが私たちに問われているんだろうと思います。日米安保ガイドラインについても、理想なり基本理念なりはしっかりと押さえる一方で、現実場面では社民党は何処までは認めるが、それ以上は認められないという現実的な基本線を人々にはっきりと打ち出す必要があるんじゃないでしょうか。

参院選の課題

参院選は、そうした自分たちの基本政策をはっきり打ち出して闘うべきなのでしょうが、時期的にもそこまで打ち出して闘うには準備不足という感があります。結果はもしかしたらかなり厳しいものになりそうですが、新しい政治勢力の結集というスタート台にすべきではないでしょうか。新しい政治の軸として再出発する力を残せるかどうかが参院選のポイントじゃないでしょうか。そういった意味では市民の絆は小さいけれども非常にいい可能性をもっているんじゃないかと思っています。市民レベルの中で、いつも全面的に社民党を応援するのではなくて、人々にとっていいことならば、一緒にやれる関係、パートナーといった存在で、その関係を深めながら

双方が大きくなっていく、それが社民的な政治になっていくのじゃないかと思っています。

その時、過去に社会党と一緒に担ってきた人たちが、その過程で一緒になるのは当然なんだけれども、過去には批判政党としての社会党の意義は認めつつも、決して社会党には票を入れなかった人たちも含めて、新しい政治が作られてくるようになることが大切なんだろうと思います。その転換点とするためという観点からも参院選は重要な選挙ではないでしょうか

自分のやりたい課題

昨年十月頃、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に町田市は災害備蓄品（今回は乾パン）を送りました。通常は議会構成などの関係で、北朝鮮に物資を送るのは難しいといわれています。町田市でも一部の自民党議員が、これに触発されてか、その後北朝鮮に対し拉致事件での抗議文を議会に提案、採択されるということがありました。これは議会サイドの動きですが、これとは別に、私自身も民間サイドで集めた基金をもって、北朝鮮に行きました。これは日本野鳥の会の女性を中心にした有志が北朝鮮に生息するクロツラヘラサギの故郷にミルクを送ろうという話があり参加したものです。

北朝鮮は、日米安保ガイドラインでも仮想敵国、紛争地域になっていて、そこから有事立法なども組み立てられていくわけですが、そうした国家が決めた一方的なイデオロギーの対立なり溝を埋めていくものは、まず個と個のつながりが最初にあり、民衆同士の顔と顔がみえてきて、今の政府の外交のあり方はおかしいんじゃないかというふうに広がっていくものだと思います。それなくして、国家の方針転換はありえないんだろうと思います。そういった意味では、国家と国家の交流や自治体と自治体との議員交流というものよりも、まず一人一人のつながり、民間のつながりを行政は、支援していくべきだろうと考えています。議員としての私の役目の一つもそこにあるんじゃないでしょうか。韓国に留学していたということもあり、個人的には朝鮮半島の問題に関心があり、地域でそれに取り組んでいきたいと思っています。まず、今年の7月には「在日」の上映会を成功させたいと考えています。

あと、多摩丘陵の自然をどのように残していくかという問題や教育のあり方についても取り組んでいきたいと思っています。行政に対し市民サイドから現実的な代案を示し現実的に何かを実現しうるような政策能力や政治力量も持った市民運動を作り出していくことが大切なんじゃないかと思っています。

(了)

みて、きいて、歩いて、感じて

「つくり隊／連続フィールド企画」実・行・中！

未来はみんなで作りたい（花崎 晶）

春になったら、楽しいことをやりながらもうちょっと仲間もふやせるといいね、ということで、3月・老人ホーム、4月・フリースペース、5月・米軍基地という訪問企画を立てました。ちょうど2回目までが終わったところ。最近のつくり隊は、それぞれ仕事や地域活動、そして参院選に向かう動きが加速するなどしてきて、グループとして新しい人をさそったり、継続的な勉強会などは正直言ってしばらく難しい状況。でも忙しさに埋没していると、時間ばかりはどんどん過ぎて、社会のさまざまな現場で起きてることに直接ふれたり、生の対話を交せる機会は減ってしまうのよね。

そこで、月に1回。前後の打ち合わせも入れて月2回位なら、なんとか持ち回り責任で集まれるだろうという、今の私たちとしては結構ギリギリ、でもやっぱりやると面白いじゃん！という所を選んで出かけています。

まったく新しい人も来るよ

情宣は、簡単なちらしを作ってそれぞれが知人に送ったり、若干集会で配布するのと、「週刊金曜日」



に情報を載せてもらう程度。出かけていく企画なので最大でも20人以内と考えているし、会場を借りたりする手間も費用もかからないから結構気がラク。これが意外に「金曜日で見たんですけど」という問い合わせが入って全く知らない人との出会いもある。初回は3人程、2回目は5人もそういう新しい人がいた。訪問先でも複数の人に会えるし、たまたまそこに来ていた人なども加わってこれまで2回はワイワイにぎやか。個別のテーマにひかれて集まっている人ではあるけれど、交流会の話しが尽きなくなって終電に駆けこむようなこともある。やっぱり、企画をやりながら動きながら、出会ったり議論したり、考えたり、ということが自分たちにとっても面白いし必要なんだとあらためて感じています。そこから、継続的に、あるいは断続的に一緒に活動できる人が、1人でも2人でも現れるかもね、という希望があります。

Vol.1 養護老人ホーム「浴風園」

2月20日、冷たい雨が降る夜でしたが、東京都杉並区に古くからある「浴風会」を訪ねました。ここは、老人専門の病院と特別養護老人ホーム、軽費A型ホーム、養護老人ホーム、在宅介護支援センターなどが広い敷地内に幾つも建っている総合福祉施設。私たちはこの社会福祉法人の組合の方の案内で、おとし建て替えたばかりという個室完備の老人ホーム「浴風園」を見学し、お話を聞きました。

大部屋でカーテン1枚のプライバシーという収容施設的な居室とは全く違う、小さいながらも個人の自由空間が保障されているのは、画期的だと思いました。個室にすることで、人間関係のトラブルやストレスは減り、逆に孤独や運動不足の人も増えたとのこと。全体には明るい雰囲気、食堂やラウンジ、浴室、サークル活動をする部屋などは共有スペースとしてありました。職員にとっては、1部屋1部屋の目配りが大変になり、病院等含めて全体の経営は苦しいため、事業の一部（たとえば調理部門）が委託にされてしまうといった合理化もあったそうです。若い人の組織化はやはり難しくなっているよ

うですが、一応組合がきちんとした形で存続し、活動をしている印象でした。

ほどこしの福祉から権利としての福祉へ、あくまでも自立への手助けであり、血縁にたよらなくても生きあってゆける社会的な事業が福祉であるはずだといった話、最後まで人間らしく暮らせるところはどのような場所なのか地域なのか、それを自分たちも求めているし一緒に作りたい、といった言葉が聞けたのは嬉しかった。そういった理想を言うところではないほど労働状態が悪化している施設も多いときくと、高齢者ケアの問題とそこで働く人の職場環境をまもっていくことは、一体のものだと感じました。また介護保険の問題点について、福士敬子さん(本紙 20号に登場)からかみ砕いた説明をしてもらい、ますますひどくなる老人医療の行く先を思うと、一同「う～ん」と絶句又は唸る者多し、でした。

Vol. 2 子どもと大人の居場所「たまりば」

4月17日はフリースペースの「たまりば」。すでに8年もの歴史をもち、教育やスペース関係では知る人ぞ知る所。多摩川のそばにあって、誰でも溜まって居られる場所だから「たまりば」です。世代、国籍、障害の有無などにかかわらず、自らの意志でここに来たいと思えば来ることができます。オープンは月曜から金曜の10時半から6時ごろまで。今はマンションの1フロア、大きな居間のような、遊び場のような、いろんな物がいろんな風に置いてある大部屋です。会員制だけど、来方は人によってまちまち。決まったプログラムはなし、出欠もとらない。ピアノを弾いても本を読んでも、料理をしてもいい。何もしないで休んでいてもいいし、散歩に出かけてもいい。誰かしら集って昼ご飯をつくる。食べたい人は250円で食べていい。やりたい企画があったら提案してこの指とまれ形式でよびかけ、運営する。通信「たまげた」をみると、田んぼ作業あり、きのこ採り、海遊び、楽器作り、ワークショップやキャンプもあって、すごい自主企画目白押し。

そもそもは、代表の西野さんが10年前、学校に行っていない子どもと街を歩く体験学習を始めたのがきっかけ。その頃は学校に行かないだけで犯罪的な、まともな大人になれない子という世間の目を向こうにまわして、さまざまな場所に出かけて遊んでいたのだといいます。生きることそれ自体が悩みになっている、苦し

い、行き場がなくて死にたいという子とつきあう中で、「ほんとはぼうっとしてられる居場所がほしいだけ」という言葉をうけてスペースづくりが始まりました。その後は、学校に行かない人々激増。大人も子どもも居場所を失ったような状況が社会の表面に見えるようになった。

「ぼくたちのたまりばは、フリースクールとは呼んでいません。学校に代わる学びを提供しなきゃイケナイとは思っていないんです。スタッフもみんな自分にとってここが必要な場所だから関わるというのが基本。何年かやってくる中で、不登校だから学校の代わりにここでよろしくという依存や期待が見えてきて困った。だから専従もお金をとらない任意会員制に変えて、自分がほんとに何をしたいのかをじっくり見極めることのできる場所、学校の代替物ではないし、何かをしてあげる場所でもないことを明確にしたところなんです」。「たまりば」での2時間ではとても話しが尽きず、飲み屋に場所を移してさらに深夜まで。塾の先生、高校の教員、保母、区の社会教育担当など、関連職業の参加者が多かったり、最近の学校現場で起きている事件などもあって、事の深刻さを実感しました。でも、学校教育の問題点は今かなりはっきりしてきているし、その問題解決をしていく道のりの1つとして、自前でいろんな形の場所をつくり社会的に認知させていくことも大切な試みだと感じました。運営それ自体が大変な努力ではあるけれど、切実な願いは存在しています。

* 次回は、5月24日(日) 午後に第3弾・厚木基地歩きにでかけます。関心のある方は、つくり隊にご連絡下さいね。果たしてメンバー拡大なるか? 3回終わってからですな。

菅原方

TEL&FAX 03-3314-1505



編集後記

4月、様々な人と出会う機会がありました。一つは、青年学級に集まってきた卒業生たち。25年前に養護学校を卒業した人も来ていましたが、20年以上働いていた会社から解雇されたり、会社自体が倒産したりして、新たな働き口を探していました。ハローワークに相談に行ったようですが、肝心の専門担当官が3人から2人に減らされたそうです。聞くと昨年から今年にかけて、失業者がぐっと増えて、一般の窓口業務に移らざるを得なかったそうです。経済不況の影がまず最初に落ちていくのは、やはり社会的弱者のところなのだと思感。障害を持っているといまいと、あるいは障害が重いか軽いかに関わらず、誰もが皆、人のために社会の中で、役に立つ存在であることを欲しているという言葉が、心から離れません。

でも一方では、労基法の改悪に対して、全労協や全労連、連合などの統一した行動が作られつつあります。世の中を変えていく大切な芽の一つになるんじゃないかなと思います。私たち働く者や生活する者が一緒になってがんばりましょう。

(千)

希望の21世紀宣言

私たちは、現在のモノ中心の社会を、人間が人間らしく生きることのできる社会へとつくり変えていくことをめざします。

人間らしい社会—人と人が平等に、ともに助け合って、人間が自然の一部としての本来の姿で生きることのできる社会—を実現することこそが、人々の希望です。私たちはそのために、あらゆる領域で民主主義を徹底し、民主主義の実現をはばむものに対してたたかいます。

私たちは、世界に戦争と大国主義の不平等をもたらす憲法改悪を許しません。9条の理念の実態を日本から作っていくことによって世界の平和と民主主義の実現に貢献していきます。国と国とは対等平等の関係にあり、人間らしく生きることの豊かさの尺度に、人々の在り方を人々が決め、どこの誰も本当に武力を必要としない国際社会の実現こそが、平和の実現です。

私たちは、地域から国の進路、世界の在り方を決定する政治的な力をつくっていきます。そのために、私たちの意志、知恵や力を結集し、互いの経験に学び合い、信頼を築き合いながら、自治の実現をめざします。何かに頼ることなく、広範な人々とともに、変革の力をつくり、その統一を推進することを自らの役割とします。

世界の現実を変えること—それは私たち自身の在り方、運動の在り方を変えることなくしては実現できません。私たちは自らを変え、人と人との関係を変えあうなかで、現実を変革していきます。本音を出し合い、あらゆる困難をともに克服し、成功や喜びを、そして失敗や悲しみをも共有し、助け合ってたたかいの輪を広げ、その中に新しい社会を準備していきます。

人間らしい社会の実現をめざし、世界の平和と民主主義を求める人々とともに、希望の実現に向けて進みます。

1部200円 定期購読をよろしくお願ひします！年間購読料3000円（送料込み）

郵便振替：00100-1-97125『希望の21世紀』

月刊『希望の21世紀』●31号●1998年4月26日

発行●「希望の21世紀」全国委員会

編集●希望21三多摩 印刷●Jam Print

連絡先●希望21・三多摩

東京都日野市多摩平6-20公住219-5 三浦方 TEL&FAX 0425-82-2407

●希望21・京都

京都市伏見区石田西ノ坪1番地 醍醐石田団地1号棟417号室 吉田方

TEL&FAX 075-572-4445

●希望21・未来はみんなでつくり隊

東京都杉並区高円寺南2-39-15 光荘203 菅原方

TEL&FAX 03-3314-1505

●希望・大阪

大阪府門真市北巢本町17-7安井文化202 戸田方

TEL&FAX 0720-85-6491

